



心に残る とっておきの話

普及版第八集

潮文社編集部編

心に残る
とっておきの話

普及版第八集

潮文社編集部編

心に残るとおきの話 第八集〈普及版〉

平成15年12月20日発行

編 者 潮 文 社 編 集 部

発行者 小 島 米 雄

発行所 株式会社 潮 文 社

〒162-0843 東京都新宿区市谷田町 2-31

電話 03-3267-7181(代)

振替・00140-7-69107

組 版 株式会社 三光デジプロ

印 刷 有限会社 埼京印刷

製 本 株式会社 越後堂製本

© CHOBUNSHA 2003 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

ISBN 4-8063-1367-X

漱石より賢い者

「ボルテールより賢い者がいる、それは世間だ」というフランスの格言があるが、これを日本風に言い換えれば、さしづめ「漱石より賢い者、それは世間だ」ということになるか。そこには民主主義の基本にある一般市民への信頼と期待があるが、『心に残るとつておきの話』が読者の圧倒的な支持を得てきた背景にも、これに通ずる新鮮な驚きと実感があつたと思われる。

「良書中の良書」「わが家の宝物」「心の琴線にふれる玉章」「人間万歳と叫びたくなる様な一冊」「現代の経典」などといった読者からの絶賛の声が続いた。

それにしても、私達も本書がここまで巻を重ねることになろうとは当初予想もしなかった。原稿を寄せて下さった皆さん、そしてご支援下さった皆さんに厚く御礼を申し上げます。

新装普及版の発行にあたって

もつと読みやすく、もつと安く、という読者の要望にお応えして、文字も大きく、ふりがなも多くして、ここに新装普及版を出すことにしました。

一冊あたりの収録篇数は少なくなりましたが、その分はいずれ後日、出させていただくことにして、多くの方々に読んでいただけると幸いです。

なお、筆者の年齢、職業等は旧版当時のままにしました。

(平成十五年十二月)

心に残るとっておきの話 普及版第八集／目次

漱石より賢い者

潮文社編集部

新装普及版の発行にあたって

少年とパイロット

中川 清爽 元高校教諭

九

仏さま

石原 彰二 幼稚園職員

一三

あんたはお母さんかい

海田眞榮子 金光教師

一六

ふるさとせんせい

澤本多美江 主婦

二〇

髪は染めても

鈴木 義男 元小学校校長

二七

まじないの手形

湯田 勇治 元中学校教諭

三二

子だね石

宮本 孟士 元高校教師

三五

焼け跡の子供達

飯田 静江 無職

四〇

犬に看病されて

関口多景士 元地方公務員

四七

嘘

吹原 寿子 主婦

五二

赤いランドセル

関口 圭一 元貿易会社勤務

五七

乞食と少佐

原田 修司 司法書士・行政書士

六三

父への詫び

出島 稔士 会社役員

七三

子を亡くした母犬

嘉村 正規 元中学校校長

八一

特攻前夜

八嶋 幸彦 会社顧問・元警察大学学校校長

八六

わが家の宝もの

小澤昭一郎 元小学校教員

九〇

二人の若者の死

市川多津江 元看護婦

九四

一羽の雀

福田 禮吉 元小学校教員

一〇一

ある鉄道員さんのこと

並木 キチ 農業

一〇六

ドントスラムザドア

平澤 伸雄 翻訳家

一〇九

母の執心

清水 静夫 元会社役員

一一二

万事円満に

本田美智子 手話講師

一一九

あるパン屋さんのこと

鈴木 喬 元会社役員

一二六

天のゆりかご

松本喜美子 元小学校司書

一三三

ある病院でのこと

梅木 望輔 元商業デザイナー

一三八

生きているだけでいい

金田 幸枝 主婦

一四二

今も聴こえる友の叫び

坂本 尚 元中・高校教諭

一五一

芋

高畠 利夫 元会社役員

一六〇

夜の山道にて

吉岡 洋一 社会福祉施設援助職員

一六四

お墓の不思議

辰巳 宣博 臨床検査技師

一六九

勲章をもらった馬

東 陽春彦 元会社役員

一七八

私の幸運

田原 一重 知的障害者施設理事・医師

一八五

あけび

高山 珠美 会社員

一九八

忘れ得ぬ子供たち

豊永 裕 元小・中学校校長

二〇三

義母の言葉

高橋百合子 ホームヘルパー

二二一

畑のこころ

紙屋クミエ 元看護婦

二二二

るりたては蝶

今北 英夫 元出版社社員

二三〇

小さな命

鈴木三枝子 学習教室経営

二三八

ばあちゃん

品部 弥生 主婦

二四二

牛の涙

北島 文子 鍼灸師

二四八

病気の娘に教えられて

岡嶋 恵子 家庭教師

二五五

お地藏さん

塩田栄美子 主婦

二六四

あの時はありがとうございました

長川 春枝 主婦

二六六

少年とパイロット

なかがわ
中川 清爽
せいそう

昭和八年生（熊本県）
元高校教諭

もう半世紀以上も前の、大戦中のことであつた。

私には行則君ゆきのりという友達がいた。行則君は遊びが上手で、身のまわりにあるものなら何でも遊びの道具にしてしまう。おかげで私は遊び道具をあまり買った記憶がない。また、彼は機械いじりも好きで、ミシンなど簡単に分解していた。が、もともとおとなしくて、人前で目立つことはあまりなかった。そんな行則君が好きで、私はよく彼の家に遊びに行っていたものである。

その日は外で二人、チョンカケごまの練習をしていた。非常にむずかしい技術のいる独ひと

樂^まだった。それだけに、その楽しさもほかの独樂の比ではなかった。ところが、二人が独樂に夢中になっていたその時、突然、飛行機の爆音がし、アメリカの戦闘機一機が低空飛行でせまってくるのが見えた。行則君と私は防空壕に向かつて走ったが、間にあいそうになかった。私達はとっさに木の陰に身を寄せた。戦闘機は、パイロットが見えるくらいの低空飛行であつた。

バリ、バリという機銃掃射の音を聞いた時は、生きた心地ではなかった。ところが、三十メートル位はなれたところにヒューン、ヒューンと、弾丸^{たま}が地面に突き刺さっていく。どう考えても、私達に弾丸があたらないよう掃射したとしか思えず、それは子供ながらも死の恐怖と生の喜びを同時に感じた瞬間であつた。生きていることはこんなにうれしいことかと感じたことは、はじめてだつた。

ところが、戦闘機は旋回して、再び私達の方に向かつてきたのだ。今度は逃げ場がない。機銃掃射で蜂^{はち}の巣になるのではないかと頭の中は混乱した。

その時であつた。なにを思ったのか、行則君が突然飛び出して、戦闘機に向かつて大きく手を振りはじめたのである。私は「こっちにもどれ、死ぬぞ」と必死で叫んだが、彼は、

懸命に手を振り続けた。すると、驚いたことにパイロットも手を振って、それに応えてい
るではないか。

木の陰から、私にもその姿が、はっきりと見えた。

行則君は戦闘機が見えなくなるまで手を振っていた。

私は彼のところへかけ寄ったが、行則君の目には、なぜか涙が光っていた。死ぬぞと叫
んだ私は、言葉もなく行則君を眺めるだけだった。その時の行則君の顔は、今も脳裏にや
きついている。

「なんで機銃掃射しなかったのかね」と行則君に話しかけたが、彼は「わからん」と言っ
ただけで、あとはいつものように、にこにこしているだけだった。

私はあの時、飛び出すことなど考えることもできなかった。近くの大牟田市は、すでに
空襲をうけていたので、私はアメリカの戦闘機に恐怖感を持っていた。それにしても、あ
のおとなしい行則君がと思うと、私は彼が身の危険も考えず飛び出したことが、どうして
も理解できなかった。

その後、私は親の転勤で六年間お世話になった村を離れ、行則君と別れることになった。

その後も親の転勤で転々と住居が変わったが、平成五年、四十六年ぶりの同窓会案内状をいただいた。会ってみたい友達が何人もいる中で、行則君のことが気にかかっていた。あの日、機銃掃射をうけた時、突然飛び出した時の心境を聞いてみたかった。四十六年間、ほとんどの級友と会っていなかったのだ。行則君とも四十六年振りの再会である。

会場に着いて驚いたことは、別な所で会ったら誰だかわからないぐらい、皆、変わって来たことである。私は控室を回って行則君をさがしたが、姿が見えない。おかしいと思い、名簿に目を通して驚いた。行則君の欄には死亡と記してあった。私は彼のあの時のあの涙を思い出し、何とも言いようのない寂しさを感じた。

行則君はあの時、パイロットは撃たないと直感して飛び出したのだろうか。しかし、もう行則君の気持ちを知るすべはない。

いかに戦時中とはいえ、戦闘機のパイロットも、自分に向かって手を振っている子供を殺す気にはならなかったのだろうか。「地獄で仏」という言葉はあるが、それにしても、あの激しい太平洋戦争のさ中、あれは、奇跡の中の奇跡、ほとんど考えられない出来事であつた。

あの時、銃口をそらしてくれたパイロットがご健在なら八十歳台位と思うが、きつといい家族に恵まれ、幸福な人生を送られているに違いない。軍人である前に人間愛あふれるアメリカ人だったような気がしてならない。

仏さま

石原 彰二

昭和二十二年生（岐阜県）

幼稚園職員

何でも突き詰めて考えなくては気がすまない、そのために自分で自分を追い込んでしま
う、そんな頃だったから、高校の二年か三年だったと思う。

そろそろ寒くなり始めていた時のことだ。いつものように何かを考えながら、岐阜市内
の街なかをぶらぶら歩いているうちに、妙なものに行き会った。

仏さま

やせかけて背中まであばら骨が浮き出てしまった小犬が、あっちへまたまた、こっちへふらふら、さまよっている。両のまぶたは、もうほとんど閉じていて、今にも倒れそうなのに、どこへ行くつもりなのか、それでも一所懸命に先へ進もうとしている。

安全な歩道と、車の行き交う危険な車道の区別さえつけられなくなって、車道の方にさまよい出て、自分の命を奪うものから身を守ろうとする意識さえ見せない。抱き上げて一時的に安全な所へ移してやったとしても、もう、その命は知れている。かわいそうだが、どうしてやることもできない。

寒さをしのごうと手を突っ込んでいた学生服のズボンのポケットに、五十円ほどの小銭があるのに気づいた私は、特に深い理由もなしに、ふっと近くの駄菓子屋に入って、小さなアンパン一つと牛乳を買い求めた。

アンパン一つ十円、牛乳一本十五円。私の記憶違いで、その頃はもう少し安かったかも知れないが、とにかく、ささいな金額だ。でも、ほとんど金に縁のない高校生にしてみれば、それでもかなりの「無駄遣い」ともいえる。

車道にへたり込んでいた小犬を、車のとぎれるのを見定めながら、急いで抱きかかえて